

一つの正しき科學史研究の立場を指示するものとして意義深きものを有つものと謂はざるを得ない。

然し乍ら、其にも不拘私は、著者が古代科學者の業績叙述や古代科學の系譜的解明に終始する事を避けんとし乍ら、而も尙其に徹し得ざるものあるを認めざるを得ないと同時に、著者の如く宗教性、實用性よりの解放即科學の發達と斷定するは、科學發達の原因究明に對する餘りにも單純なる考へ方ではあるまいかと思はざるを得ない。合理主義を生命とせる科學の發達は、非合理的なる宗教的桎梏より解放せられる事に依つてのみ可能ではあつても、實用性が果して科學の發達を阻害するものであるか否かに就いては、私は多大の疑問を抱かざるを得ない者であるからである。素より卑俗なる日常的實用性は、宏大にして深遠なる科學の發達を停滞せしめこそすれ促進はしないであらう、然し歴史の合理性に依つて貫かれた實用性を荷負つた科學は、却つて其故にこそ眞に生命あり充實せる内容と具體性を有つた科學として發達する筈であり、又事實發達したのだからである。吾々は科學を、餘りにも世俗的なものに緊密容易に結びつくと考へてはならないと共に、又餘りにも超越的なもの永遠なものと考へてはならないのではなからうか。永遠なるものは、歴史の中に具體化せられる事に依つて却つて永遠の生命を有つ物であり實在となる。古代科學發展の跡を展開明示せんとする本書が、歴史的究明を志し乍ら尙素朴なる歴史主義の立場を脱脚し得ないものではなからうかとの危懼を抱く者、私一人ならば幸であり又私の理解の至らなさを

深く耻ぢる者である。

ハイベルクは謂ふ迄もなく、古代科學史の權威である。而も其深遠なる研究の成果が、邦譯小四六版にして僅かに二百頁の中に著はされてゐるのである。本書の中に於て、古代科學史が有つ諸問題が凡て完璧に解決せらる可きであるとするが如き批判は嚴に憤まれたければならないし、又著者の一言一句の中にも、吾々の容易に思ひ及ばざる含蓄多き内容のあるであらう事を知らねばならない。況して私は、譯者がいみじくも警告せられた「文化における科學の役割を十分に察知してゐながらも、敢て科學の内容を知得しようとしなかつた歴史家」の一人であつた。私が本書譯出の意義に就て愚見を述べたのは、唯原著が果して吾々に、科學史研究の態度に就いて特に新しき示唆を與へ、従つて其處にも此邦譯の意義が存するか否かを探ねんとした爲に外ならなかつた。私が此譯書に依つて古代科學に關して教示啓發せられた事は、素より數限りなく多かつたのであり、恐らく其は一般讀者に對しても然るであらう。「科學する心」の高く叫ばれつゝある今日、西洋史專攻の學究は素より、一般讀者の精讀を薦めて已まざる者である。(創造科學叢書(2)、定價壹圓四拾錢、創造社發行) (西井克己)

G. Ricciotti : Histoire d'Israel

Paris 1939

羅馬ラテラン聖約翰修道僧たるリテオッチの原著をパウル・アウヅレに依りて佛譯されたもの。二編より成り、第一冊は本文

五三四頁、第二冊は五七八頁、前者は太初より幽囚まで、後者は幽囚より紀元一三五年迄が含まれて居る。

現在に於て従来の基督教の解釋に對して多くの人々の不満が有ると考へられる。従つて基督教に對して、殊に、斯の教が初めて傳道された當時に就いての研究は大に起りつゝあることは周知の事實である。

併し、イスラエル民族の通史に就て見るときに、神の選民たる意味に於て特殊の取扱ひが、未だ充分に除去されて居ないやう考へられる。本書が、イスラエル民族を説くに當つて、絶えず、彼等の周圍に注意を拂ひつゝ歩が進められて居ることが知られる。その範圍が屢々弘きに失するのではないかとさへ思はれる程である。序論に於て、パピロン、アッシリア、埃及を説き、更にアマールナ時代より、當時のイスラエルを観ることにして居る。又考古學的立場をも併せとり、發掘による史料をも検討したる後、本文に入つて居る。斯くして、宛然、イスラエル民族を中心として見たる古代東方史とも謂ひ得られる。

従つて、本文に於ても、絶えず周圍と接觸を保ちて居る姿を窺ひ得られる事は、やがて、強いて、イスラエル民族を選民とのみ見ないで、寧ろ周圍に影響を授受する有様を背き得られる。

アケメネス王朝の波斯と交渉を持ち、アレクサンドロス大王及びその後繼者の有したる希臘文化の風潮を如何に觀るかに就いても示唆に富むのが感ぜられる。殊に重暎として覆ひかゝつて來る羅馬の勢力に關しても、それが謂はれる。斯くして、遂にエルサ

レムの陥落となり、最後に、ハドリアヌス治下に生じた、アエリア・カピトリナの植民地の創設に對する叛亂となり、五十萬以上は落命し、生ける者が流浪の民に出る有様を叙して居る。

尤も、長き時代に互り、弘き範圍に及んで居るだけに、細かに詮索する時に缺點があるであらう。又、必ずしも、最新の研究を悉く網羅した苦心の作とは云へないかも知れぬ。併し、豊富なる挿畫は、懇切なる叙述を生かして居ると云ひ得ると考へられる。

歐米の學者の多くの努力に依つて、種々なる發見がなされた。今後もこの意味に於て、幾多の研究が積まれることであらう。しかも、東方の姿を再検討することが我々に與へられた課題とするならば、歐米の斯界の權威の力作をよく理解する上からしても、本書の如きに據つて一先づ基礎工作をなすことは決して無意義ではない又通史として觀るに於て更にその價值を有するものかと信ぜられる。(岡島誠太郎)

地理論叢 第十一輯 皇紀二千六百年記念號

京都帝國大學地理學教室編

時代の轉換の中にあつて、地理學の重要性が認められ、認められる程、自己の無力を味はねばならぬ地理學徒は、新しい地理學の建設に必死の努力を續けてゐるのである。然しながら、新地理學の建設は坦々たる大道を歩む様なものではなくして、ジャングルの中に踏みまよつた旅人にも比せられるであらう。

皇紀二千六百年を記念して、京大地理學教室が、新地理の建設に